

田村利良の思想と行動

— 限りなく理想を追い続けた人 —

山 崎 益 吉

Masukichi YAMAZAKI

- I 哲人政治
- II チェルタルドとの姉妹都市締結
 - (1) イタリア語講座開設
 - (2) 中学生のチェルタルド派遣
 - (3) 国際交流基金創設
 - (4) 国際交流振興会
- III 物産センターの開設
- IV 城下町小幡の整備
- V 田村利良の思想
 - (1) 田村利良と二宮尊徳
 - (2) 田村利良と儒教、『論語』
 - (3) 田村利良と田村の家系

I 哲人政治

田村利良は政治家であるか。また、哲学者か。さらに、教育者か。哲学者風でもあり、教育者田村でもある。だが、一番すっきりするのは政治家、田村利良であろう。これも断言しづらい。政治家田村利良というとき、政治家らしくないからである。何しろ、選挙運動は熱心ではないし、陣中見舞いも一切お断りというのであるから、従来の範疇からすれば、これほど政治家らしからぬ人も珍しい。だが、政治家ではないとは断言できない。哲学者、これが一番よく当てはまるように思われるが、自信はない。教育者かどうか。教育者田村の側面も強い。しかし、断言できるほどの資料はない。それゆえ、実績で言えば、政治家田村利良が一番適切であろうが、政治家の烙印を押され、苦言を呈すかもしれない。それもよく分かる。しかし勢多農林を卒業と同時に、農民運動に身を投じたり、さらに旧小幡町の町会議員を務めるなど、実績から言えば政治家田村利良が相応しいと言えよう。

ただ、政治家田村利良と位置づけるだけでは本質を見失いがちなので、名誉のためにも補



田村 利良 (1917~2006)
(田村利久氏 提供)

足が必要である。かつて勝海舟は西郷隆盛を評してつぎのような名言を吐いたことがある。海舟曰く。「小さく打てば小さく響き、大きく打てば大きく響く」。田村に相応し名言である。西郷もけっして能弁ではない。木戸孝允のような舌剣の持ち主ではなく、横井小楠の舌剣もない。どちらかと言え、**「訥弁」**である。初対面の人は、哲人政治家などと言われるれば戸惑う。どちらかと言え、**「剛毅木訥」**だ。だから**「仁」**に近い。実は雄弁なのだ。流暢に立て板に水というのではなく、誠心誠意、心の底からこみ上げてくる言葉に説得力がある。誠の一字からくる雄弁政治家・田村利良である。哲人政治家という意味が誠の一字から来ている点では、田村と接している人ならば誰でも納得するであろう。政治家の条件に言葉の手練手管は必要ない。「取り持ち」や「口利き」

など言語道断であろう。政治家の条件は誠の一字があるかどうかにある。田村利良（大正6年—平成18年，1917—2006）という政治家はそういう人である。

そこでこの小論では、数多くある業績のなかから、筆者が直接田村と関わった点に立脚し論を進めたい。『町政への伝言—二期八年を回顧して—』を参考に、田村も「あとがき」で明言しているように、一番の政策として取り上げているイタリア・チェルタルド市との姉妹都市締結、筆者もそれを先ず取り上げたい。つぎに、物産センターについて触れてみたい。これは横井小楠が万延元（1860）年に福井藩で実践した物産総会所が根底にあるからである。ほぼ150年前、横井小楠の構想になれるものである。さらに、どうしても取り上げなければならないのは城下町小幡の整備である。これには触れないわけにはいかない。今日の城下町整備の礎になっているからである。最後に、二宮尊徳との関係、田村の思想的背景となった儒教、とくに『論語』、さらに田村の家系との絡みで思想と行動を明らかにしていきたい。

II チェルタルドとの姉妹都市締結

田村町政8年のなかで一番力を入れた政策がイタリア、チェルタルド（Certaldo）市との姉妹都市の締結である。田村はこう述べている。

「私の8年間の在職中でイタリア・チェルタルド市との姉妹都市締結は最大の事業であった。

（昭和）58年当時、この地方における国際交流に対する認識は極めて低く、姉妹都市締結には懐疑的な空気が支配的で、締結は勇断をようするものであった¹⁾。

「あとがき」追記の中で特記していることを考慮しても分かるように、8年間の最大事業であったと強調している。昭和58（1983）年と言え、オイル・ショック後の日本経済、日本社会をどうしたらいいかということに汲々となっていた時代で、国際交流はまだ遠い将来のことであるという認識が支配的であった。田村がこの地方でという表現をしているが、甘楽富岡を指していることは言うまでもない。とくに甘楽町ではそうした雰囲気はなかったと言っている。町政を預かる以上成功しないと命取りになりかねない。「勇断をようするものであった」。なみ

なみならぬ決意の程が窺える。では、この地方、甘楽町における姉妹都市締結への勇断はどう展開されたであろうか。筆者も直接関係しているので順次述べてみたい。

日本経済、日本社会の流れはオイル・ショック後大きく変わった。具体的に言えば、資源の効率的な使用である。石油づけ経済、生活からの脱却である。省エネルギー時代の到来であった。このため、中央も地方も自立した地域づくりが求められた。特色ある地域づくりの幕開けである。新しい日本のあり方、新しい日本社会の生き方は何か模索された。地域社会が生き生きして存在することが日本社会の活力、魅力に繋がると考えられたからである。こうした背景の下、日本では東京大学の玉野井芳郎教授、京都大学の河野賢司教授を代表とする地域主義研究集談会が形成された。玉野井教授が高崎経済大学に非常勤講師として来られていた。玉野井氏の提言によって、高崎経済大学に群馬地域主義集談会が発足することになった。メンバーは四宮三郎、高橋勇輔、長谷川秀男、山崎益吉、松下定光など高崎経済大学の先生が多かった。群馬地域主義集談会発足当時、趣旨はこういうものであった。

「地域主義は地方から欠落された地域個性を再生させ、伝統と文化の地域差別に満ちた多様性の中に国民的合意を求める方向です。これが私共の集談会の共通した意識です。

こうした地域個性を取り戻すためには、あらゆる層、あらゆる職業の人々が共に相集まって、主体的に積極的に、多年の経験、抱負、意見を出しあえる現代版『寄り合い』の輪を広げていくことが必要だと思います。

私共が設立しようとする群馬地域主義集談会は、群馬の地域住民の一人として、群馬にあって群馬各地域のあり方を、毎月、群馬の各地で、各方面の多くの方々と共に、大いに談じようというものです²⁾」。

地域の個性を重視した地域作りの提唱である。第1回を月夜野町で開き、第2回は館林で開いた。甘楽町では昭和54年に集談会が開かれた。と同時に、この集談会は甘楽町地域主義集談会の発足でもあった。なぜ甘楽町に地域主義集談会が発足するようになったのか。群馬地域主義集談会の事務局は高崎経済大学内におかれた。筆者が大学に勤務している関係上甘楽町にもということで地域主義集談会の発足を見た。始めは「80年代の甘楽町を考える会」というものであったが、発足一年にして甘楽町地域主義集談会に変更した³⁾。この会に田村利良も参加した。これが機縁になって、将来の町づくりが進められることになる。

この地域主義集談会から町づくり構想が浮かび上がった。群馬県でも群馬ルネッサンス運動の一環として自立する地域を支援していた。筆者もルネッサンス懇談会委員として参加していた。群馬県では、仲介役として、県庁内にふるさとサロンを開いていた。各地を回って自立する地域づくりを支援しようというものであった。当時ふるさとサロンの参事をしていた清水弘志氏が直接の窓口になっていた。私は清水氏に「甘楽町で是非ふるさとサロンを開いて欲しい」と依頼した。その結果、武家屋敷で女性だけのサロンが、元勘定奉行高橋家で開かれることになった。この時イタリアから女流作家バシオ（Carla Vasio）氏も来町、いたく甘楽町が気に入り、姉妹都市を締結するなら甘楽町がいいということになった。この時、秋畑の獅子舞なども披露、イタリア使節団の目にとまったようである。この筋書きにはさらに伏線があった。松下定光氏が代表を務める館林地域集談会も清水参事に姉妹都市締結を申し込んでいた。甘楽町の後館林を訪問することになるが、甘楽町が候補にあがったので館林はもれることになった。

もし館林が選ばれていたならば、その後の展開は大きく変わっていたかもしれない。正式な締結は数年先のことになるが、決定的なことは甘楽町、チェルタルドに共通性があったことである。チェルタルド市も中世風の面影を漂わせる地域づくり、町おこしをやっているという点でよく似た町である。チェルタルド市はボッカチオ (Giovanni Boccaccio, 1313-1375) との関連で大変有名で、ボッカチオ一色である。トスカーナ (Toscana) 地方の重要な拠点で、チェルタルドワインも健在である。広い意味でフィレンツェ (Firenze) 県の一角を担う重要な都市である。

正式に調印が締結される前、私はチェルタルド市を二度訪問している。田村町長が正式に締結を表明してくれているので、前もってチェルタルドを見ていかなる町かを確かめてみたかったからである。この経緯については、拙著『地域ルネッサンスの誕生』に記しておいたので、少し長いが紹介しておこう。

「フィレンツェから50キロメートルのローマよりの処にこじんまりした人口16000ばかりのチェルタルド市がある。フィレンツェへは電車とバスで行ける。バスは二時間ばかりかかるが、丘陵地帯を越えていくので実に眺めが良い。バスで行くよりは電車で行く方が便もいいし、時間も早い。フィレンツェからピサ (Pisa) 行きの列車に乗って、途中エンポリ (Empoli) で乗り換え (直通が便利)、シエナ線でシエナ (Siena) に向かいまもなくするとちょうど上州福島駅程度のチェルタルド駅に着く。駅前には小公園になっていて、樹木が生い茂り落ち着いた景観を見せている。

駅前通を数分歩くとチェルタルド市役所に出る。市役所前に広場があって、かの有名なジオバニー・



チェルタルド駅前 遠方にオールド・タウンを望む
(浅香百太郎氏 提供)

ボッカチオの銅像があり、通常ボッカチオ広場と呼ばれている。ボッカチオはイタリア・ルネッサンス (Renaissance) の先駆けて『デカメロン』 (Decameron, 『十日物語』) で有名である。ルネッサンスは中世封建社会から人間を解放させ人間と自然の再発見として自由な活動をとおして、人間の生き方を模索した一大文芸復興運動であった。さらに古代ローマの生き生きとした人間の生き方、あり方を再生 (ルネッサンス) しようとした運動であった。その先駆けをなしたのがボッカチオである。『デカメロン』はそうした雰囲気新鮮なタッチで描いて見せたわけである。

8年前ボッカチオ死後600年祭が、フィレンツェ州とチェルタルド合同で行われた。チェルタルド市役所を訪れると快く出迎えてくれ、いろいろ資料を持たせてくれた。そのとき、ボッカチオ死後600年祭の立派なポスター、中世文学と題したボッカチオを宣伝したポスターを他の資料と共にいただてきた。

市役所から数百メートルの所に小高い丘がある。ここに家並みを見下ろしながら静かなたずまいを止めている中世の家並みがある。駅前市役所付近と較べるとまるで中世に引き込まれたような錯覚を覚える。石の壁、石畳みの道路、石造りの家、もともと古い町全体は外敵を防ぐために造られたものであろう。趣のある城門が当時の面影を偲ばせてくれる。ヨーロッパの都市はキリスト教抜きには考えられない。釣り鐘をもった教会が人目をひく。

外に目を転じると、古い家並みとは別に田園風景豊かな農村が広がる。ブドウ畑が点在している。フィレンツェから50キロ離れているせいか、チェルタルドは近代化の波から取り残されているようである。そのことがかえって幸を得ているようだ。チェルタルド市も甘楽町と同じように古いものを大事にしなければならないと気づき始めている。古い家並み、ボッカチオを全面的にアピールしているところを見ると、過去の遺産を大事に残していこうとする熱意を感じないわけにはいかない⁴⁾]

これでチェルタルドの概要が掴めたのではないかと思う。

私はチェルタルドに足を運ぶたびに田村町長に見聞記を披瀝し、甘楽町と締結するに相応しい都市である旨を説いた。こうして姉妹都市の締結は昭和58年10月に執り行われる運びとなった。残念ながら田村町長は都合により出席できなかったが、代わりに梅沢助役が代行した。調印式はプレトリア宮殿でチャンポリーニ市長との間で取りおこなわれた。協定書の内容は以下の通りである。『町政への伝言』から引用しておこう。

「イタリア共和国チェルタルド市および日本国甘楽町は、共に美しい自然環境に恵まれた歴史と文化香る都市である。

文化国情が異なる両国の間で、個性豊かな地域として共通性を持つ両都市が遠く離れた立地条件を乗り越えて手を結び、相互の生活、歴史、産業経済等につき理解を深め、友好親善をはかることは、国際理解と友好親善の輪を世界各地に広める契機となる有効な方策であることを確信し、ここに両都市は、友好親善姉妹都市の協定を結び、この喜びを長く共有したいとの願望を強く表明するものである。

今や、世界はながい歴史の中で、かつてないほど切実な問題として、各国の連帯、宥和、協調を必要とする時代を迎えている。両都市の市民、議会、首長は、この共通認識に立って、この世界的課題に対して『一粒の麦』として、先駆的な役割を果たしたいと念願するものである。世界の平和と繁栄に貢献できるように努力することをこの機会に宣言する。

1983年10月20日

両都市を代表して

イタリア共和国 チェルタルド市長 アルヒエロ・チャンポリーニ

日本国 甘楽町町長 田村利良

代理 梅沢一雄」

この締結に対して田村利良はこう述べている。

「この文化の薫り高い協定書全文は梅沢助役の手によるもので、協定書にもられた理念はチェルタルド市においても高く評価され決定されたものである⁵⁾」

こうして、田村の並々ならぬ努力によって姉妹都市が締結され、今日まで続いている貴重な国際交流の原点はここにある。国際交流があまり公論とならない時期であっただけに田村の姉妹都市にける意気込みは相当なものであったと言っている。甘楽町における国際交流の意識は極めて低く、姉妹都市締結に疑義をもっている人も多かった時期だけに、田村としては不転の決意で臨んだに違いない。いまでこそ気軽に海外に出かけるが、当時、疑問視する声も多かった。失敗したら最高責任者としての立場もあろうから、田村が町政8年のなかで最高の議案としたこともよく分かる。町長が調印式に出席するよりは消防団の出初め式に出る方が重要視された時代である。梅沢助役が急遽代理出席したのも国際交流の意識の低さを物語るものであった。

今日まで交流が続いているが甘楽町への影響は計り知れないものがあったと述べている。中学生を交換留学生として送り、イタリア文化、チェルタルドの歴史に触れる機会に恵まれたことの意義は大きい。これほど感動した生きた教育は外にはない。これに啓発された中学生は枚挙に暇がない。甘楽町にとってこれほど生きた教育は外にはなからう。調印から四半世紀が経過しようとしている。

ここで田村の姉妹都市の効果について整理しておこう。昭和58年当時日本に対する外国の風当たりは相当なものであった。日本は経済大国で世界からカネを巻き上げていくという風潮が強かった。日本製品不買運動などが展開され、日本商品たたきが横行していた。日本が通った後は草木も生えないなどと悪評をかったりもした。なぜなのか。日本には文化の香りが無いというものであった。文化国家日本への期待でもあった。田村は文化大国の夢を中学生に託したのかもしれない。最終的に国家の品格を決定するのは経済力ではなく文化の力である。協定書に歴史と文化が大きく取り上げられたのはそのためである。

こうした視点の下、田村はつぎつぎに画期的な事業を実施していく。それはつぎの諸点に要約できよう。

(1) イタリア語講座開設

イタリアとの交流であるから先ずイタリア語の学習が必要である。言葉は文化であるから、言葉をとおしてイタリアの風土、文化人との交流に役立てる。けっして流暢なイタリア語を駆使しなくても交流を深めることができる。イタリアの使節団がやってきたときに先ず最初に交流したのは大人ではなく子供達であったことが深く印象的であった。大人達は頭で考えるが子供達は行動で理解する。国際交流が子供の未来のためにあることの理由がこれでよく分かる。中学生で派遣されその後の人生に国際交流の重要さを認識し自らその道に進んでいった例はまれではない。甘楽町に居を構える必要はない。世界のどこかで活躍する人材に育てられるならば大成功である。甘楽町からの補助金で派遣されたのであるから甘楽町に貢献してあげなければなど言う人がたまにいるが、これでは真の国際人は育たない。国際交流の狙いは田村が強調するように広い視野で物事を考える人材の育成におかれていくわけであるから、広い意味で

の国際人の育成が姉妹都市の真意である。協定書に謳われているとおり、「国際理解と友好親善の輪を世界各地に広める契機」が目的であり、その結果、甘楽町が世界に誇れる歴史や文化を生かした町づくりや地域興しができればそれにこしたことはない。イタリア語講座の開設は田村のそうした真意を実現したものである。



姉妹都市締結10周年記念モニュメントと共に。左端が田村利良。
左の建物は10周年記念の際田村が寄贈した茶室。（浅香百太郎氏 提供）

イタリア語教室開講について『町政への提言』にはこう記されている。

「チェルタルド市との交流に伴い使節団の派遣、中学生のホームステイの実施と合わせて国際親善に役立てるために、一ノ瀬俊和氏（外務省嘱託、平成4年、イタリア語講座講師）に依頼開設することになった。中略……このイタリア語教室は現在も続けられている。この教育にはチェルタルド派遣の中学生の事前学習として10-15名の一般参加者が受講しており国際的関心の高まりと共に今後も増加するものと思われる⁶⁾」

（2）中学生のチェルタルド派遣

順序は逆になるが、つぎは、中学生のチェルタルド派遣である。田村のチェルタルド市との姉妹都市締結への思いは強く、締結以前から使節団を派遣している。使節団派遣は昭和58年に第1回が実施され、チェルタルド市からも子供たちがやって来た。子供たちを交え有益な交流がもたれた。この時の様子を田村はこう書いている。

「子供達は我々の心配をよそにお互いに日本語とイタリア語で話しかけ肩を組んでは騒ぐ姿を見て、純真な子供達の世界には言語、風俗、習慣や民族のちがいを超えて心の通じることを知った。感激である。心の温まる思いだ。

この交流が、私に次の中学生の交流事業を決意させることになる⁷⁾」

この交流がきっかけになって、第1回中学生チェルタルド派遣が実現することになる。だが、派遣が順風満帆というわけではなかった。一部には強硬に反対する者もあった。だが、大多数の議員は賛成で順調にいった。田村は国際交流の意義を以下のように力説した。

「国際化は21世紀への大きな流れとなっていること。国際化時代に対応した、視野の広い人材の育成が新しい町づくりにとっても必要であること。

人づくりはそのときになって急に作ることは出来ない。10年15年先を考えて行われなければならない、それは今から始める必要がある⁸⁾」。

案ずるより産むが易しではないが、派遣された中学生の感想はどれも満足行くものであった。

「もう一度会いたい、人情の厚い魅力のつきない国。思い出が心の中で何倍にも膨れあがるようであった。日本を客観的に見られたことは素晴らしいことである。日本人で自分を見つめ直せたことは、意義があった。交流で視野が広がった⁹⁾」。中学生は率直な意見を述べた。

この事業は今日まで続いている。20年以上にわたって有用な人材を排出し現在に至っている。田村の先を見通す目が正しかったことを証明する事業であると考えていい。

(3) 国際交流基金創設

第3は国際交流基金の創設である。派遣事業を継続していくためには先立つ基金が必要である。国際交流基金は昭和59年6月に制定された。財源はゴルフ場から上がる税金の一部が充てられた。派遣事業を後押しする点では是非とも必要な基金であった。だが、これも最初から順調にいったわけではない。選挙戦がらみの反対もあったと田村は述懐している。中学生の交流に全面負担というわけにはいかない。行かない中学生との格差が生じるため、ある程度の補助はあっても納得いくが全面的というわけにはいかない。一部を補助するにしても基金はどうしても必要になる。この基金は当初5千万円であった。5年間で目標を達成ということであったが、一部の寄付があり3年で達成された。中学生ばかりではなく一般の町民も使節団として訪問している。そのために国際交流協会の創設も必要であった。その協会の設立は昭和61年1月に決定を見ている。田村は民間人を活用する。民間人が本気で交流を続けるためには、行政の手から離れた組織が必要であると考えたからである。本格的に民間人による交流がなければ行政だけでは限界がある。おそらく、どこの自治体でも国際交流が竜頭蛇尾に終わっているかまた終わろうとしている要因を田村はよく心得ていたからである。

(4) 国際交流振興会

このほかイタリア・チェルタルドの関係で言えば、国際交流振興会の設置も必要である。イタリア文化を研究することは、今後の教育に大いに役立つ。国際交流振興会の創設は焦眉の急であった。その真の目的は将来を担う人材の育成にある。この事を田村はことあるごとに強調していた。しかし行政だけでは限界がある。主体はあくまでも民間でなければならないというのが田村の持論であった。民間外交が本格化することによって国際化が本物に近づいていく。国際交流振興会の設置はまさに民間外交を促す起爆剤であった。

田村が町政8年のなかで一番の政策課題がイタリアとの国際交流の開始にあったと強調しているように、今日考えても正解であったと言えよう。教育が国や地域社会を支えることを強く認識していたからである。義務教育が特に重要である。なかでも、多感な年頃の中学生の派遣が重要である。田村の在任中チェルタルドの国際交流について側面から応援してきた筆者にとって、国際交流を政策の筆頭においてくれたことは甘楽町にとって大きな財産であった。国家100年のためにはやはり人の育成が一番である。田村がよく口にしていた言葉である。その思い通りに進行している。

Ⅲ 物産センターの開設

数多の田村の手になれる政策の中でつぎに取り上げたいのは物産センターの開設である。物産センターはチェルタルドとの姉妹都市締結後の昭和59年開設された。ここで開設にこぎつけるまでの経緯を述べておきたい。田村の町づくりの構想は町長に就任する以前から固まっていた。田村は町長に当選する以前は甘楽町地域主義集談会の有力なメンバーでもあった。地域主義集談会が昭和54年笹の森の参集殿で開かれたことがある。そのおり田村はパネラーとして甘楽町の将来構想を披瀝している。小幡については高速道路より南の地域は歴史、文化を大事にするエリア、高速道路よりも北の部分は農業、工業エリアと大きく区分した。とくに城下町を抱えているため楽山園を中心に歴史、文化を生かした地域づくりが必要であるという提言であった。



甘楽町の窓口の一つ 物産センター（筆者撮影）

町長に当選してからこの路線は変わらなかった。当然、歴史的遺産、文化を活かした地域づくりは観光を伴う。観光は文字通り地域の光を見ることであるから、地域が光り輝いている必要がある。甘楽町に来て食事をしたり、何か土産物というとき、光り輝く物、特産品は欠かせない。そうした点からも、物産センターは是非必要であった。

私は町長に物産センター構想を打ち明けたことがある。町長は興味を示し、甘楽町でも物産センターの建設が是非必要であると認識していたようである。物産センター構想は、実は幕末に横井小楠が福井藩で実践したものであった。横井小楠の経済思想を研究している私は、ためらわず横井小楠の富国策を甘楽町で実践できないかと思ったからである。¹⁰⁾横井小楠は越前の窮状を打開するため、由利公正をして藩内の物産をくまなく調べ上げさせ、藩内の正直な者を元締めとして大問屋構想（今日の物産センター）を打ち出し、藩内で取れる農業生産物を調べ上げ、その産物で国づくりの活力源としたのである。農民が藩内の産物を持ち寄って輸出できるものを輸出し、外貨を獲得し、藩財政の建て直し、藩経済の活性化、つまり今日の公共投資によって、藩民を豊かに導こうという富国策であった。民富論である。先ず藩民が豊かにならなければ何のための富国策かになりかねないからである。これよって長崎交易は藩に巨万の富をもたらした。藩の金庫が小判の重みでそこが抜け落ちたという伝説まで残っている。¹¹⁾

この構想を甘楽町にも適応できないか考えた。構想は大まかなものであったが、発想としては近代日本の富国策の元になったもので何とか応用できないか考えた。町長に就任してか

らの田村の物産センター構想に少なからず影響していたとみていい。後に述べるように、田村は基本的には農本思想家である。田村の生い立ちから考えれば無理からぬことであるが農業に熱心な町長でもあった。二期目の昭和60年の2月に開設しているが、基本構想は笹の森で披瀝された田村の町政に対する基本姿勢に端を発していると言っても過言ではない。今でこそ各地に物産センターが開設されているが、当時としては一種の賭に近いから二の足を踏むことが多かった。無理もない。上手くいかなければ責任問題が浮上する。そうなれば町長の椅子を無理して賭ける必要もない。火中の栗を拾うには勇断が必要であった。田村はその栗を拾ったのである。

周知のように、日本経済は第1次オイル・ショック、第2次オイル・ショック後大きく中身を変えた。とくに、第2次オイル・ショック後の日本は経済は地域の活力が急務となり、地域主義集談会も地域再生にはいかなる方法があるかを模索し始めた時期であった。魅力ある地域づくりが日本全国で展開された。有名などころでは大分県の湯布院や大山町などで、先端を走っていた。長野県では馬籠などが真剣に過疎からの脱却を計っていた。愛知の足助町も頑張っていた。そうしたなか、甘楽町も日本地域主義集談会の影響下、日本でもいち早く地域再生の切り札として城下町小幡の活用が叫ばれるようになった。城下町小幡構想に物産センターを結合する道はないものかと腐心していた。歴史、文化を生かした地域づくりのために甘楽町で取れる農産物を結合すれば新たな魅力が付け加えられることになる。いわゆるシュンペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950) の、「イノベーション (innovation)」、¹²⁾「新機軸」、¹³⁾「技術革新」である。各農家で生産した物を加工販売すれば、付加価値が加えられて大きな価値を生むことになる。外国交易という横井小楠の構想におよばないとしても、甘楽町の農業生産物にとって大いに刺激になることは間違いない。ここに新結合としての物産センターが誕生することになる。物産センターは田村町政第一期の総仕上げの時期と重なる。昭和59年4月の開設であるから一期目終了の3ヶ月あまりのことであった。この時の様子を『町政への伝言』はこう伝えている。「物産センターは農家の生産物販売を主目的としており、農家の手による新製品の開発に期待したい」(圏点筆者)と強く要望しての誕生であった。まさに農業の技術革新が根底にあった。その代表例が秋畑で開発されたキジ肉とキビの炊き込みの桃太郎ご飯であった。農業の新機軸がそこにはあった。桃太郎ご飯は好評で、従業員が食事をする暇もないほど盛況をきわめた。キジ肉、キビの炊き込みがまさに「新機軸」の最たるものであった。これは物産研究会からのアイデアであった。さらに、桃太郎伝説を逆手に取ったことも好評を博す原因となった。新商品の開発である。シュンペーターの「新機軸」を実践したことになる。

だが、物産センターが成功するためにはソフト面が必要である。田村はこの点つぎのように述べている。

「このような施設を町で経営して成功している例は少ないといわれている。しかしこの運営が軌道に乗らないようだ」と町で行う全ての仕事と同じ目で見られることになる。ここでの業績の正否は役場全体の評価におよぶことを心にとめて努力してもらいたい。

又みなさんはここへきた人に職員を代表した顔として接することになる。良い印象を与えれば、役場全体が良く思われ、悪ければ役場全体の印象が悪くなる。そのことを心にとめて一所懸命努力してもらいたい。¹⁴⁾」

田村はよく言っていたことであるが、物産センターが来客者に対して良い印象を持ってもら

うためにはいくら新商品を提供しても職員の対応が良くなければ、魅力は半減するどころかお客が来なくなる。田村は接客の重要さを強調すると同時に、物産センターを甘楽町の窓口として行政の効率をも狙ったのである。これも「販路の拡大」という点では「新機軸」と考えていい。そのためには、対応への「新組織」が必要である。この点についても田村は心を配る。田村がとくに強調したのはトイレを清潔に保つことであった。物産センターが甘楽町の顔であるとするならば、物産センターの顔はトイレである。いくら商品が良くとも、トイレが汚いようでは、物産センターの魅力は半減してしまう。田村はことあるごとにトイレの掃除をきちんとするように指示した。トイレに行っても臭くない。清潔で掃除が行き届いていることが重要である。接客がいいか、経営がしっかりしているかどうかは、トイレを見れば分かる。これが田村の持論であった。これも立派に、シュンペーターの強調する「イノベーション」、「新結合」である。町の顔としてトイレに拘った理由がここにあった。流石である。

今日でこそ物産センター構想は全国各地で展開されているが、甘楽町が開設した昭和59年当時はまだ珍しかった。物産センター構想は一種の賭であったろうから、開設には勇断が必要であった。田村はなにも役場がやる仕事ではないと言っていた。農協でやる仕事であると強調していた。内容から考えればやはり農協が関わる事業であろう。その後の展開を考えれば、物産センター構想は農協が関わる所が多い。それを取って役場が引き受けたのはリスクを承知の上での田村の勇断とみていい。ここで田村はイノベーター（innovator）の役を演じている。シュンペーターに言わせればイノベーター、開拓者とはリスクを恐れず「新機軸」に挑戦する人を指している。田村はそう言う意味でも真の開拓者、イノベーターであった¹⁵⁾。

今日、物産センターは甘楽町の顔としての機能を十分に発揮している。物産センターが栄えることは甘楽町の農業、産業が栄えることで、たんに農産物のみならず、甘楽町のステイタス上昇にも一役買っているということである。田村がソフトが重要であると説いた真意がここにある。顔としての物産センターが好評を博せば甘楽町の品位も上がり、城下町小幡との関係も良好となる。相乗効果が期待できる。今日、桃太郎ご飯は新機軸商品としてその地位を保っている。トイレの掃除も行き届いている。さらにここでしか買うことができないチェルタルド産のワインも主要な座を占めている。物産センターは甘楽町全体が連携している。町の顔でもあり、町外の顔でもある。町を訪れた人が甘楽町をどう評価しているか。『町政への伝言』には以下のような例が示されている。

「物産センターの親切な対応で、見て廻った景色迄美しいものに思えた。

訪ねた町の印象がよければ、景色迄美しく思える。反対に悪い印象を与えればどんなに美しい景色でも美しく感じなくなるものである。

北区から来た人からこの職員を嫁にと申し込まれた。結婚していることを知らされて、この人は多分に心残りの様子だったと後で聞いた¹⁶⁾」。

IV 城下町小幡の整備

城下町小幡の整備は田村が最も力を入れた事業であり、基盤づくりと言う点では田村の功績が大であると言っていい。城下町小幡の整備はこれでいいということはないため、どこまでが

田村の業績かとなるとこれだということは決定しがたいが、織田信雄（のぶかつ）がここ小幡に陣屋を開いた当時の内容に沿って進めるとすれば、楽山園の意義をしっかりと受け止めることが前提条件になると考えていい。そのことをきちんと認識し、楽山園から城下町小幡の整備を計画したことをもって決めることが重要である。ここでは、この楽山園整備の決定をもって城下町小幡の整備と考えたい。町長に就任する以前、町づくりに関心を持っていた人たちはやはり楽山園から始めている。田村もその点を強調していた。城下町は広い。だから部分としてはいろいろな側面から城下町の整備は始まっている。例えば、織田七代の墓地の保存運動もそのひとつである。また小川堰の再発見、堰の保存という点でも城下町小幡の整備の道と考えてよい。さらに、大手門前の古い養蚕農家の保存も城下町整備への道である。武家屋敷群の保存も然りである。元勘定奉行の屋敷である高橋家の保存、織田サミットも同じだ。しかし、何と言っても原点は楽山園の整備から始まると考えた方が本質を押さえている。田村はこの点をきちんと認識していた。

「大名庭園楽山園は織田信雄（信長の二男）が徳川家康より、大和松山（現奈良県大干陀町）に3万石小幡に2万石で封ぜられ、この地に居を構えた後、京都より当代第1級の茶人藪仲剣仲を招き7年の歳月と巨万の富を投じて庭園を築かれたと言われている。

……楽山園の名称は論語の智者は水を楽しみ仁者は山を楽しむから取ったと言われており、いろは48石の中で『臥牛石』、『馬鞍石』はとくに有名で、『馬を華山の陽に帰し、牛を桃林の野に放つ』という中国の故事に基づく、元和堰武の象徴として造られた¹⁷⁾」。



甘楽町の原点・楽山園
馬鞍石（中央）臥牛石（右端）も見える（筆者撮影）

田村が町長に就任する以前よく楽山園のことが話題になった。田村が一番懸念したことは、開発が民間の手で行われ陣屋跡が開発されてしまうことであった。だから陣屋跡の持ち主であった堀口中庸（なかつね）さんの協力が是非必要であった。堀口中庸さんが陣屋跡の土地を所有していたからである。田村が町長として楽山園のために先ずしたことは堀口さんの協力を得ることであった。だが、これはなかなか容易ではなかった。なぜかといえば、地価の問題が絡んでいたからである。適正価格が判断できないという問題があった。欲しければ路線価格など論外であるからである。この問題で用地交渉に時間がかかったことは事実である。難産の末堀口中庸さんの協力を得ることが出来、保存の目途が立った。城下町小幡の原点は楽山園にある。田村

はそのことをよく認識していた。私はその言われを調べ上げ、地域づくりに興味を抱いていたメンバーに披瀝した。田村も町長以前は町づくりの有力なメンバーであったので、前述の田村の証言はそれによるものであった。「言われている」という表現はそれを如実に物語るものである。

そこでもう少し、田村の言を補足しておこう。楽山園は、『論語』の雍也編から取られている。「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ、知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者は寿（いのちなが）し」。孔子の晩年を謳ったものである¹⁸⁾。孔子は自らを仁者と見た。知者ではない。知者は流動的である。仁にまで上り詰めていない。仁者は信雄の心境で、徳川に忠誠を誓う心境でもあった。信雄の前半は知者、権謀術数を基準とした。だが、晩年は徳川に恭順を誓うことによって、仁者たらんとしたのである。さらに、元和堰武とも一致する。元和堰武は文字通り戦いを止めることであった。これからは平和の世でありますようにという願いが込められている。信雄はここ小幡の里に仁者、平和を求めた。小幡の里はそれに相応しい土地であった。だから、楽山園にいろは48石を配し平和の世を願ったのである。なかでも、臥牛石、馬鞍石が有名である。これは中国の古典『書経』に由来する¹⁹⁾。『書経』にはこうある。『書経』大禹謨篇に「馬を華山の陽に帰し、牛を桃林の野に放つ」（馬を華山のみなみに帰し、牛を桃林の野に放つ）とあるが、楽山園の中身を謳ったものである。これには説明が必要であろう。古代中国、周王朝は殷を滅ぼし周王朝を築く。そのとき武王は、戦いのシンボルである戦馬を華山（中国五岳の一つ）の陽（みなみ）に帰し、桃林（とうりん）に牛を放ち、平和を願った。通常、「帰馬放牛」として親しまれている。楽山園は戦争放棄、平和のシンボルなのである。信雄はこれに目をつけ楽山園に築山を築き、いろは48石を配し、徳川に忠誠を誓ったのである。甘楽町の地域づくりはここら始まるとした田村の判断は正しかったという意味は、以上の理由をよく認識していたからである。

私も田村とともに楽山園が甘楽町の原点であると考えている一人である。その後、田村は楽山園に多方面からアプローチすることになる。楽山園は近くは紅葉山、遠くに熊倉山を借景としているため規模からいっても文字通り日本一の庭園、いや世界一の庭園かもしれない。後楽園や偕楽園よりも規模、中身もその比ではない。私もそう考えているし、田村も同じ考えであったに違いない。だから波及効果は大きかった。資料館の建設もその一環である。雄川堰の保存、名水百選への運動も城下町づくりである。伝統的建造物群への取り組み、ホープ計画もそうである。ワイン造りも同じである。菓子作りも楽山園を商標として使った。好評であった。楽山園の精神はどこへ出しても決して恥ずかしくないから普遍性がある。田村もこのことを認識していたからこそ、堀口中庸氏からの用地買収に全力投球したわけである。

甘楽町の町づくりの原点は楽山園であり、城下町小幡の地域づくりも楽山園にある。大手門前の古い養蚕農家群が城下町と一体となって進められるのも楽山園があるからである。城下町小幡は縦横無尽に他の要素と絡み合っている。それだけに優れた要素をもっている。姉妹都市締結に決定的な影響を与えたのも城下町小幡であった。甘楽町が今日魅力を放っているのは楽山園があるからだ。歴史を現在に活かすということはまさに楽山園の精神を現代に甦らせることである。姉妹都市や資料館、物産センターに繋がっている。城下町小幡は町全体と表裏一体をなしているのである。そのことは田村がいつも力説していたことである。

V 田村利良の思想

「町政への伝言」を紐解くとき、政策実現の多さに驚かされる。よくも短い8年間に数多くの実績を残したものであると改めて田村の偉大さに目を見張らざるをえない。田村が築いた政策は今日まで連綿として続いている。甘楽町への貢献がいかに偉大であったかは、田村の死後改めて認識せざるをえない。その田村を支えた思想はどこから来ているのか。最後にその点を探っておきたい。

田村は、文章など改めて書いたことがないと述懐しているように、その道の専門家ではない。田村の思想的根拠は何かと問われたならば、これと言って何があるのかと言いたくもなる。しかし、あの強い信念はどこから来るのか。田村の言論から推測する以外にない。やはり農家に生まれた田村は大自然や農業、青年団活動を通して培ったとみていい。町長を退任してからは悠々自適な農業に従事している点からも、彼の根底には農本思想が流れているとみて間違いはない。さらに私は田村と生前親しくさせていただいた点から推測しても、やはり、農本思想家であると確信している。この点、商人と異なる。商人の思想ではない。そうかと言って、実業肌でもない。農家、農業、自然、大地、天地、天地の大道、誠の大道、天道、人道などの言葉が田村にはよく似合う。その思想的根拠は二宮尊徳にあり、尊徳から大きな影響を受けていたことが分かる。もう一つは田村がしきりに援用する『論語』である。『論語』の素養がある。そこで思想的根拠を(1)二宮尊徳の農本思想からの影響、(2)儒教、『論語』の影響、(3)田村の家系。この三点をよりどころとして田村の思想的根拠を尋ねることにしたい。そこで、まず田村のエイトス(精神)を箇条書きに示しておこう。

- ①信念・誠実(しんねん・せいじつ)：何事にも信念の人、誠実このうえない。
- ②清廉・潔白(せいれん・けっぱく)：清廉、潔白の人であることは誰も納得しよう。
- ③廉恥・謙譲(れんち・けんじょう)：廉恥、謙譲は基本姿勢、破廉恥な人の見本。
- ④正心・誠意(せいしん・せいい)：身を修めるを前提として正心、誠意を常とする。
- ⑤質素・儉約(しっそ・けんやく)：己には限りなく、質素にして儉約を旨とする。
- ⑥布施・推譲(ふせ・すいじょう)：儉約した財を惜しげもなく布施、推し譲る。
- ⑦正義・仁愛(せいぎ・じんあい)：筋は通すがどこまでも人間愛で包み込む。
- ⑧礼儀・叡智(れいぎ・えいち)：礼儀にかない叡知に満ちる。
- ⑨忠恕・惻怛(ちゅうじょ・そくだつ)：良心と思いやり、痛みの分かる人。

(1) 田村と二宮尊徳

田村はしばしば二宮尊徳を例に挙げている。二宮尊徳が田村に似ているのか田村が二宮尊徳に似ているのか。両者に共通性が多々ある。田村の著書の中で引き合いに出されるのは二宮尊徳、『論語』が多い。報徳思想と『論語』から大きな影響を受けていることが分かる。

そこで、まず二宮尊徳の影響を見ておこう。『町政への提言』では、苦しい予算、台所事情に鑑み、田村は「分度」の思想を提示する²⁰⁾。「分度」とは、わかりやすく言えば分相応の振り舞い、収入に見合った生活、予算内での支出、決められた力量、など分相応な暮らしをするこ

とを言う。予算内で行動すること、「分内」生活することである。決められた範囲で振舞うということになる。「天分」でもある。分相応の消費、分を超えた消費生活が長く続けば破産する。だから、尊徳は「分内」に退くよう強調する。「分内」に退くときは繁榮し、「分外」に出れば破滅が待っている。消費が「分外」に出れば身分不相応ということになり、予算オーバーは長く続くものではない。だから、人でも国家でも分を守ることが必要である。「分内」に収まることがどうしても必要なわけである。田村が予算編成にあたって「分度」を守ることの重要性を強調したのはこれがためである。だが、ややもすると「分外」に出がちである。収入に見合った支出をつい忘れ、放漫な支出になりがちである。挙げ句の果て借金地獄である。「分内」に退くことがいかに至難であるか。サラ金地獄を見ればよく分かる。田村の真意は町の予算が「分度」を大きく越えていると言いたいのである。だから、「分度」を守ることがどうしても必要であった。



二宮金次郎像（尊徳）
（山崎愛子氏 所有）

二宮尊徳の基本的な思想は「分度」の前の勤勉、節約にある。田村も質素、節約を謳う。奥さんに渡す家計費に端的に表されているように、それははたから見れば吝嗇に映るかもしれない。節約と吝嗇は異なる。吝嗇は減び、節約は栄える。吝嗇と節約とは天地の違いがある。田村はけっして吝嗇の人ではない。それどころか、徹底した節約家である。節約は剰余を推譲に廻すための原資である。田村にとって「推譲」こそ人徳的な行為、すなわち最高の善なのである。そう言えば、田村はときどき人目にもあきれるような寄付行為を行っている。これは尊徳の「推譲」の理論から来るものである。「推譲」こそ節約の奥義であると田村は見ている。ここに労働、節約の奥義がある。田村はそのことをきちんとわきまえ、言葉ではなく実行して見せた。田村曰く、

「二宮尊徳は分度を守ることの大切さを教えたと聞いている。尊徳の教えを出す迄もなく『入を計り出を制す』ことは経済運営の大原則である。欲しいからといって勝手にものを買ひ、そのために借金が繰り返されればその家は破滅するだろう。家族も財産運用に積極的に参加し、財布の中身に応じ、真に必要なものかどうか、その返済はどのようにするか等必要な話し合いを行い、家族合意のもとにその協力を得なければ健全な財政運用は出来ないだろう。町財政の運用に於いても全く同様だと思²¹⁾う」

田村が「分度」をより分かりやすく説いたもので、尊徳の思想がよく出ている。

（2）田村利良と儒教・『論語』

つぎに、孔子の影響について紹介しておこう。儒教の経典は人間の生きる原点を示している。田村の言動の根底に前述の徳目（9箇条の徳目）がよく引き合いに出だされているが、田村の人間性に合致している。田村には深慮、誠実、さらに正義、仁愛がよく似合う。清廉、潔白もその徳目の一つである。廉恥、謙譲を地でいった。質素節約家の見本であったし、それでいて布施、推譲には熱心であった。礼儀を重んじ叡知をきわめていたのは、正心、誠意を行動の出

発点としたからである。だから、人の痛み悲しみがよく分かった。忠恕、惻怛（そくだつ）の人であった。そうした田村が、政治の原点に触れた箇所がある。いかにも田村らしい引用である。

「孔子は政治の要諦についての子貢の問いに『食を足し、兵を足し、民をして信ぜしめよ』と答えている。則ち政治の要は食糧を自足し兵力を充実し、国民が信頼してくる政治でなければならない、と教えている。子貢が『その三つのうちやむを得ず一つを除くとすれば何を先にすべきか』の問いに対して孔子は『その時は兵力を除け』と、重ねて子貢が『残った二つのうち止むを得ず一つを除くとしたら何を先にすべきか』と問うたのに対して孔子は「その時は食を除け。食を除けば人は死ぬが、人間はいつかは死ぬのである。しかし政治が信頼を失ったら国は成り立たない』と答えた。2500年前の孔子のこの教えは今なお不変の真理ではないだろうか²²⁾」。

田村の政治経済論の淵源がこれで浮き彫りになった。政治的には儒教、『論語』、孔子の教え、仁、義、礼、智、信、つまり自らに厳しく律する統治、自治、信なくば立たずを実践した人であった。己に厳しく人に優しい治政であった。ここに田村の限りない魅力がある。田村死してもなお光輝している理由がここにある。「修己治人」は政治の要諦である。だが、今日この政治の要諦が分からず躓いている例は枚挙に暇がない。一連の福島県・宮崎県を筆頭に県知事の収賄事件などはその典型であろう。政治にカネがかかるとの理由で自自信をなくして墓穴を掘っているが、田村のこの姿勢を見習って欲しいものである。田村は選挙に対してもこの姿勢を押し通した。カネがかかる選挙であれば打って出ないし、かりに選挙違反でもしようものならば即刻辞任すると明言している。田村がカネをかけるとそれを取り返したくなるから、はめを外すことになると言って手作り選挙に拘った理由がここにある²³⁾。

田村は己に限りなく厳しい人であった。己を修められないようでは人を治めることはできないと考えたからである。朱子学では当たり前であるが、これが実践となるとできない。己を修めないで他人ばかり治めたがる。俺が俺がの世界が展開される。とくに朱子学では己を修めることが出発点となっている²⁴⁾。当たり前であろう。いわゆる修身である。己を修めて初めて家を斉えることができる。己が修められないものは家を斉えることはできないからである。家を斉えられないようでは国を治めることはできない。国を治められない者が天下国家を治めることはとうていできない。己に厳しいという意味が分かる。田村が己に厳しい態度をとり続けたのは以上のような理由からであった。

だが、ややもするとこの厳しい態度が誤解を生む要因にもなる。なにもそこまでなくてもというのが理由である。選挙に対しても田村はこれを押しとおした。政治的見返りを厳しく却下したため、見返りを求める人にはことのほか厳しく見えた。カネをかけるから政治が腐敗墮落する。田村の信念がこれであった。田村との政治談義になるといつも口癖のようにカネのか



『論語』遼寧民族出版社、1996年。
(筆者所有)

からない選挙を強調していたことが印象に残る。要するに、田村の原点は儒教的教義、『論語』、孔子からの影響が強いとみていい。

（3）田村利良と田村の家系

田村は農家に生まれ農家に育っているから、二宮尊徳からの影響が強いのは当然であるが、それだけではなぜ、田村が二宮尊徳かの真の理由にはならない。それを明らかにするためには田村の家系を見る必要がある。田村家の祖先は、田村次郎左衛門利重（天文10年生まれ、1540年）に端を発しているというから460年以前に遡る。六代目田村三右衛門利久が現在の田村家に居を構えることになるが、それから数えても300年以上経過している。二本の杉の大木が証明している。この土地は、農業にこれほど恵まれた所はないと述べている。田村家にとって農業は生業であり本業であり、また血筋でもあった。大地、自然、天道、人道、誠の道、忠恕、勤勉、節約、推譲などが田村家のエイトスとして流れているとみていい²⁵⁾。田村が育った時代も農業とくに二宮尊徳の報徳思想が影響している。勢多農林学校、小幡青年団の活躍など農本思想にとけ込む要素は十分あった。田村が二宮尊徳の勤、儉、譲の思想に触れるのに時間はかからなかった。勤勉・儉約・推譲の二宮尊徳の思想は田村の経済的基盤をなしたと言っている。これが町政の予算編成に生かされている。尊徳は三年の蓄えのないのは国の呈をなしていないと言っ



現在の田村家 先祖は天文年間460年以前に遡る（筆者撮影）

ているが、田村はそこまで厳しく考えていないが、「分度」を厳しく考えていたことは間違いない。基本的には働く以上に消費はできないが家計も国家予算も同じである。それが可能なのは借金をして賄われているからである。町の財政に厳しく「分度」を適用しようとしたのは「分度外」の生活がいつまでも続くはずはないと見なしていたからである。田村は健全財政に腐心した。何とか「分内」に退かせようと懸命であった。尊徳を基本とした「分度」の思想の実践

は、田村家に連綿として受け継がれたエイトスと考えてもいい。田村も田村家の伝統をきちんと受け継いでいる。勤勉、節約、推譲という伝統である。それはたまたま二宮尊徳の思想に符合したまでのことであったかもしれない。460年以上も農業の営みを受け継いでいるわけであるから、その伝統は体に染みこんでいると見た方が説得力があろう。その血筋はそう簡単に崩れるものではない。二宮尊徳より早くから農本思想が流れていたと言えよう。田村のなかには伝統的な大地への取り組み、勤労、儉約、正義、天道、人道、誠の精神が自然と身についていたと考えていい。農業は誠の営みである。大自然、大地は正直で誠実な者にその秘密を打ち明ける。誠実に働きかければきちんと答えてくれる。怠れば実のものも実のらない。農業とはまさに誠の営み以外ではありえない。天から与えられた誠の働きを実践する以外にはない。

自然を相手に小さなことを積み上げる以外には実りを期待できないのである。尊徳の言う「積小為大」(小を積んで大をなす)である。田村家に伝わる農業に携わるエイトス(精神)がまさにこれであった。年々歳々日々繰り返される誠実な農業の営みが、田村の血となり肉となっていたということであろう。政策実現に家系の重みを感じないわけにはいかない。

最後に、田村に相応しい言葉を贈って本稿を閉じることにはしたい。中国の古典、四書の一つ『中庸』にはつぎのようにある。

「誠者天之道也。誠之人之道也」(誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり)²⁶⁾

(やまざき ますきち・本学経済学部教授)

[注]

- 1) 田村利良, 『町政への伝言—二期八年を回想して—』, 233頁, 鳥影社, 1994年。
- 2) 山崎益吉, 『地域ルネッサンスの誕生』, 30—33頁, 日本経済評論社, 1984年。
- 3) 山崎益吉, 前掲書, 32—33頁。
- 4) 山崎益吉, 前掲書182—183頁。
- 5) 甘楽町広報, 1984年, 1月。
- 6) 田村利良, 前掲書, 143—144頁。
- 7) 田村利良, 前掲書, 84頁。
- 8) 田村利良, 前掲書, 157—158頁。
- 9) 田村利良, 前掲書, 161—162頁。
- 10) 『横井小楠関係史料(一)』, 『国是三論』, 日本史蹟協会編, 東大出版会』参照。

『国是三論』は福井藩松平春嶽の要請によって書いたもので、『富国論』, 『士道論』, 『強兵論』から成りたっている。重要な論策『富国論』は基本的にアダム・スミスのそれと同じである。近代的要素を十分もっている。幕末維新时期一步抜き進んでいた。公議公論体制と共に近代日本をリードする理念であった。「五箇条のご誓文」は文久年間の『国是七条』に由来している。なおこの点については、山崎益吉の以下の著書を参照されたい。『横井小楠の社会経済思想』, 多賀出版, 1980年。『経済倫理学叙説』, 日本経済評論社, 1995年。『横井小楠と道徳哲学—総合大観の行方』, 高文堂, 2003年。なお、共著として『実心実学の再発見—いま甦る江戸期の思想』(小川晴久編著), 論創社, 2006年。

- 11) 由利正通『子爵由利公正伝』, 三秀舎, 1940年, 参照。
- 12) J. A. Shumpeter, "Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung 1926". 塩野谷祐一訳, 『経済発展の理論』(岩波文庫)参照。このなかでシュンペーターは新結合(neuer Kombinationen)の例として次の五つを挙げている。①新商品の開発, ②新生産方法, ③新しい販路の開拓, ④原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得, ⑤新しい組織の実現, すなわち独占的地位の形成。独占の打破。
- 13) 田村利良, 前掲書, 126頁。
- 14) 田村利良, 前掲書, 127頁。
- 15) J. A. Shumpeter, 前掲書, 参照。

- 16) 田村利良, 前掲書, 128頁。
- 17) 田村利良, 前掲書, 63頁。さらに「帰馬放牛」について小野沢精一, 『書経』(下), 「武政」に「乃堰武修文, 帰馬干畢山之陽, 放牛干桃林之野」(乃ち武を偃せ文を修め, 馬を華山の陽に帰し, 牛を桃林の野に放つ)(471頁)とある。新釈漢文大系, 明治書院, 1985年。
- 18) 貝塚茂樹訳注, 『論語』, 中公文庫, 雍也篇にはこうある。「知者楽水, 仁者乐山, 知者動, 仁者静, 知者楽, 仁者寿」(169頁)。中公文庫, 1973年。
- 19) 『書経』, 前掲書, 参照。
- 20) 田村利良, 前掲書, 90頁。二宮尊徳については『三才報徳金毛録』を参照されたい。その外門人たちの手になれる『報徳記』(富田高慶), 『二宮翁夜話』(福住正兄)など参照。
- 21) 田村利良, 前掲書, 31頁。
- 22) 田村利良, 前掲書, 37頁。
- 23) 田村利良, 前掲書, 23頁。
- 24) 宇野哲人全訳注『大学』, 講談社学術文庫, 参照。天下国家を治める方法が謳われている。「物格而后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。心正而后身脩。身脩而后家斉。家斉而后国治。国治而后天太平」(物格って后知至る。知至って后意誠なり。意誠にして后心正し。心正しくして后身修まる。身修まって后家斉う。家斉いて后国治まる。国治まって后天下平らかなり)。(37頁)。
- 25) 田村利良, 『我が人生記録』, 2004年, 上毛新聞出版局, 「我が家のこと」(118-120頁)。
- 26) 宇野哲人全訳注『中庸』, 講談社学術文庫, 参照。

〔附記〕

本稿を草すにあたってご子息田村利久氏から貴重な助言, 資料, さらに大切な写真を提供していただいた。

さらに城下町小幡の町づくりに最初から関わった古き友人浅香百太郎氏からチェルタルドの写真, フィルムの提供を受けた。田村利久氏, 浅香百太郎氏に感謝したい。